

「務めはことなれども、主は同じ」(使徒言行録六章一〜七節)

## 1 教会の要件

「務めはことなれども、主は同じ」(「コリント一二・五、文語」)。今日の箇所の説教を準備する中で思い起こした使徒パウロの言葉です。教会での私どもの働きはそれぞれ違ってはいるけれども、牧師としての務めも信徒としての務めも違ってはいるけれども、それは同じひとりの主、イエス・キリストによって与えられたものである、同じ主に仕えているという意味です。

さて使徒言行録、弟子たちがイエスを天に見送ったあと、イエスを救い主として伝道をはじめた、そこに信仰する者たちの群れができあがっていった、教会がつくられ成長し、ローマ帝国内の大小の町々にキリスト教が広がっていったその様子を書いたものです。

ここに描かれているのは紀元三〇〜六〇年ぐらい、高々三〇年間ぐらい、決して長くない期間ですが、キリスト教の歴史にとって重要なことが次々に出てきます。それらはみな、たんに昔のことではなくて、今日の教会、つまり私どもに今も直接関係することばかりです。

キリスト教、キリスト教会の発展を考える場合、もちろんいろいろな見方があるでしょうけれど、歴史の段階として重要なのは——説教でも折に触れて話しているように——最初の教会はユダヤ人のコミュニティとしてエルサレムにできあがったのです。それがやがてエルサレム、あるいはその地域をこえて広がっていき、それにともないユダヤ人だけでなく、ユダヤ人から見て外国人、聖書の言葉で異邦人が加わるようになった、さらにはほとんどが異邦人をメンバーとする共同体として発展していったということです。ユダヤ教的な要素がだんだんなくなって、信仰という言葉が強調され、ただ信仰によってのみ救われるという教えが中心になって教会は急速に発展していきます。

この異邦人への伝道は一般にペトロによって開始されたとされています(使徒一章)。しかしその前段階として今日の箇所にも名前が出てくるステファノの殉教とそれを機におこった大迫害(八・一)のことがあります。これによってエルサレムを離れざるをえなかった人々が散らされた先サマリヤで伝道します。またこれも今日の箇所にも名前が出てくるフィリポの伝道によって、エチオピアの位の高い役人が洗礼を受けるといふようなことが起こります(七、八章)。

こうして教会というものが次第にできあがっていくのですけれども、教会ができあがったとして、そこには三つの要素がなければならぬといわれています。一つは聖書です。これが基準として、規範としてなければ、教会にはなりません。使徒たちが生きていたときは、彼らの語るものが規範でした。二つ目は、信仰告白です。使徒信条もとても基本的な信仰告白です。規範である聖書に次ぐ規範がはっきりしないと教会はあやふやなものとなります。バプテスマを施すときにはそうしたものが用いられていました。そこに告白されていることを自分の告白として告白するか、受け入れ

るかということですが。使徒が存命中は使徒の語った一部がその役割を果たしてしました。三つ目は、組織です。聖書や使徒信条（信仰告白）、こうしたものがいつまでも規範でありつづけるため、それを守るためには一定の制度が必要です。これも使徒の時代はまだ整えられたものではありませんでした。こうしたものを備えた教会ができたのは、一般には相当後のことであって、使徒言行録の時代から二百年も、三百年もたつてからです。

## 2 会議を通して

今日の聖書箇所は、教会が一つの組織として整えられて存在するようになるずっと前のことですが、信仰者の群れが、一つの形をもつて地上に存在していくことになる最初の事情を伝えていきます。先ほどユダヤ人だけのキリスト教徒の中に異邦人が加わるようになったことが、大きな変化だと申しましたが、ここはまだそれ以前です。ユダヤ人だけの世界です。そのユダヤ人の中にも出身や文化に違いがあつてそれが軋轢の背景にあつたようです。

そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである（一節）。

「弟子の数」とありますが、この「弟子」というのは、ペトロらのイエスの弟子たち使徒のことではなくキリスト信者のことです。キリスト者の数が増えたことが問題を引き起こすことになったようです。

二つのグループ、いずれもユダヤ人です。ユダヤ人のもともとの居住地であるパレスチナ出身のヘブライ語を話すユダヤ人と、パレスチナ出身ではない、つまり当時ユダヤ人は地中海世界の各地にいたわけで、そこで生まれ育つた、そしてエルサレムで生活していた、当時の世界の公用語でもあつたギリシア語を話すユダヤ人（ヘブライ語は家で使われていたり、習つたりしていた人たち）とのあいだの問題です。ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出された。夫をなくした仲間の女性たちが「日々の配給」のことで軽んじられていると。

「日々の配給」というのは、食事だけでなく、必要な援助です。貧しい人に、その中にそうした女性たちも入っていたわけですが、与えられていた（二章四節）。食事はユダヤ教でもおこなわれていたもので初代教会もそれをしてきた（二章四節）。食事の会と聖餐式が一緒になされていた頃、遅れてくる人たち、とくに貧しい人たちを待たないで飲み食いし、そのことがそうした人を辱めているというパウロの叱責を前に学んだことがあります。同じようなことが起こっていたわけです。自分のことに夢中になって他人（ひと）が見えなくなる。強くない人の弱さが見えなくなる。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ二五・四〇）というイエスの言葉を忘れた共同体になりかかっているということ

です。

こうしたヘブライ語を使うユダヤ人とギリシア語を使うユダヤ人のあいだでの軋轢が教会の組織を整えていくきっかけになった。今日の聖書箇所は私ども教会の在り方の基本の考えを明らかにしているように思えます。

十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、霊と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします」。一同はこの提案に賛成し・・・(二～五節)。

ここで私どもが見逃してならない第一に重要なことは、問題の解決が、会議によって決められたということです。「十二人は弟子をすべて呼び集めて」とあり、また「この提案に賛成し」とある通りです。使徒たちが決めたとか、信徒たちだけで決めたというようにはなっていないことです。神の前でのすべての人間の平等に立つ民主主義というものがここにあるということです。教会にどのような役割があるうとも、(教会) 会議で決する、そこに神様の御心のなることを信じ、聖霊を祈り求めていく、それが教会の在り方の第一です。

その上でペトロら使徒たちがここでしたことは祈りとみ言葉の奉仕と一般的な会員のお世話というものを区別することです。祈りとみ言葉の奉仕を教会の第一のものと位置づけることと、教会の一人一人を、とりわけそれを必要とする貧しい人を支えていく奉仕を教会の第二の不可欠で、働きとして位置づけ、そのためにしかるべき人を立てたということです。

それに付け加えれば、「日々の分配」(一節)の「分配」、 「食事の世話」(二節)の「世話」、そして「御言葉の奉仕」の「奉仕」(四節)の三つの元の言葉はいずれも同じ言葉ディアコニアが使われています。ディアコニアという言葉は神に奉仕するという意味です。ディアという言葉が神にとという意味をもっています。そうすると使徒たちのすることも、七人のすることも、今日の説教題ではありませんが、務めは違って、それらは神に与えられたものであり、神に仕える者たちだということができないのではないのでしょうか。

### 3 奉仕の秩序

今日の聖書箇所を示されているのは聖霊の主権のもとにあった原初のキリスト教会の現実的で具体的な処理の仕方です。はじめに申し上げたように聖書や信仰告白の位置づけが確立し教会が成立すると、いろいろ複雑になります。しかしそれだけに、教会が組織としてどんなに整えられても私どもが忘れてならない、わきまえておかねばならないことが、ここに示されているように思います。

聖書から今日の時代まで、教会は、さまざまな組織的・制度的変遷をへて今にいた

っています。何かが、どれかが絶対的に正しく、絶対的に良い、というようなものはありません。

しかし長い歴史の中で大きくいえば三つの在り方が残り、それが今も機能しています。一つは、ローマ・カトリック教会に代表されている在り方です。つまり教皇という一人の人を立てて、神の御心を実現していくという在り方です。もう一つは、プロテスタント教会でも長老制という在り方です。長老というのは年を取っているというのではなくて信仰の面でリーダーとなるような人のことを言います。そうした人の会議によって御心を問うていくという在り方です。三つ目は会衆制です。これは私どもの教会です。これは教会員全員で御心を問い、神様に仕えていく在り方です。しかしそれらいずれにおいても会議というのが重要な役割を果たします。カトリックでも教皇を選ぶのは会議ですから。またときに第二バチカン公会議（一九六二～六五）のような本格的な教会全体会議を開催し、教会の進路を決定しています。ただ諸教派によって会議の位置づけや、あるいはやり方など、それぞれ違っていることはいうまでもありません。

今日の聖書箇所は、第一に、申し上げたように、会議、あるいは教会会議というのが教会の意志決定の方法であることを明らかにしています。日本キリスト教団も会議制を教会政治の根本としています。しかしこの会議というのはそう簡単なものではありません。政治の世界を見れば、すぐ分かります。はじめから不平等があったり、ボスがいたり、数の力で押し通したり、誠実な受け答えがなされなかったり、会議の体をなしていない場面を私どもは目撃しています。それでもこの会議というものを私どもの教会は大切にしたいと思えます。神の前で聖霊に導かれ真面目におこないたいと思えます。

今日の聖書は、もう一つ、教職と信徒、別の言い方をすれば、御言葉の奉仕と教会のお世話という奉仕と、教会には二つの機能があることを教えています。これらの相互の働きによって教会がととのえられ、福音宣教という教会全体に託された使命を果たしていくのです。

教職も信徒も互いに仕え合いつつ、主に仕えること、このことが教会という組織の基本です。次のような聖句が思い出されます。「あなたがたの知っているとおおり、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間でえらくなりたいと思う者は、仕える人と・・・ならなければならない。」（マタイ二〇・二四～二五 口語訳）。ローマ教皇は代々自らを「神の僕たちの僕」(servus servorum Dei)と称してきたということがあります。ピラミッドを逆さにした、逆三角形の一番下に自分を位置づけているということでしょうか。奉仕の秩序、これが教会の秩序です。これをもって教会は教会全体に与えられた宣教の奉仕を果たしていくのです。この八月までの歩みを神に感謝したい。年度後半の歩みの備えをともにしていきたいと思います。

(二〇一八年八月二六日)